



源豊宗先生



山根有三先生



林屋辰三郎先生

有朋自遠方来

10月10日から開催された「寛永の名筆展」は、日本的な美の極地を一面から語るものとして、竹の庭の大和文華館に最も相応しい展覧の一つであるとの好評の内に、11月11日無事終了しました。折りしも秋の行楽シーズンであり、老若男女の熱心な観覧者が時の経つのを忘れいつまでも陳列ケースの前に佇む光景が所々に展開され、私達館員も陰ながら励まされる思いでした。書というと平安時代のかな文字に代表されるものと一般には思われがちな日本の書が、桃山から江戸時代にかけて、特に長谷川等伯、宗達など巧みな画家の出現によって、下絵との絶妙な調和を見るに至ったことは大いに見直されてよい点と思われます。

こうした地味ながら一種の豪華さを備えた秋季特別展に相応しく、この間、講演会と茶会を行いました。東西から三人の講師をお招きして行われた講演会は、それぞれ異なった観点から寛永の書と文化人とを浮彫りにするものであり、「三藐院と光悦」と題する源豊宗先生の講演は、三藐院(即ち近衛信尹)の書と長谷川等伯の絵、また光悦の書と宗達の絵の組み合わせが見事に成功して、当時の書に精彩を添えていること、また信尹と云い、光悦と言っても彼らは江戸よりも

桃山時代とその生涯の大半を過ぎた人々であることを留意すべきであるとの大局的見地からの江戸の書史でした。山根有三先生は寛永の書と下絵の変遷を平安時代のそれと照らし合わせながら説明され、書と下絵が画面の内で各々を美ならしめていることを改めて解明するものでした。文化史の立場からの講演をお願いした林屋辰三郎先生は角倉素庵と光悦を中心にして展開された当時の京都の文化人の交流を立ちどころに図示されその人間模様的一端を軽妙に描出して下さいました。

変り易い秋の空の下で七回に渡って行われた茶会も、裏千家、表千家、一茶庵流の先生方と若いお弟子さん方のお手前する手元が野点での赤塗の大傘の下で、冷気に震える一コマもありましたが、名筆展に相応しい趣向と好評であり、もっと大々的な宣伝をすべきだとの声も聞かれる程でした。

館庭でのお茶会



季刊 美のたより No.26

昭和48年12月1日

発行 大和文華館